



ザ・シチズンズ・カレッジ共催講座

7月13日 銀座フェニックスプラザ

見えない「壁」がわかると世の中が見える

講師

養老孟司

解剖学者
東京大学名誉教授

無意識に目を向けると人生が好転していく！ 脳と心の関係を探る

■ あったことはしょうがないでしょ

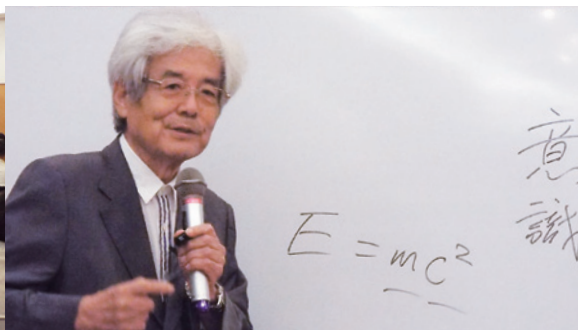
生涯学習開発財団が共催する、NPO法人ザ・シチズンズ・カレッジの第113期第5回講座が、7月13日、東京の銀座フェニックスプラザにて開催された。

養老孟司先生は、医学者としての実績と同時に、2003年に刊行され430万部を超える大ベストセラー『バカの壁』ほか、人間関係の謎を紐解いてくれる著述家としても大変人気がある。今回も200名以上の受講者で満席となった。ちなみに冒頭で先生が近年の壁の例としてあげたのは、「テロは許されない」「津波で何万人も死ぬようなことがあってはならない」といった発言。「そんなこと言っちゃったってあったものじゃないがないでしょ」というのが先生の受け止め方で、自分と違う価値観や不快なこと、興味のないことを理解しようとしにくい姿勢を壁に例えている。

■ 五感と行動の間にある「意識」

この日は人間の「意識」のメカニズムを通して、見えない「壁」ができる理由とそれを攻略するヒントを学んだ。

意識を失うとか、意識があるという言い方をするが、人間の意識とはなんだろう。脳が眠っているときは意識がない。夢を見



ている時間は脳皮質が起きているそうだが、明確に意識があるとは思えない。意識が目覚めているのに体が眠ったまま動かないのが金しぼりで、幽体離脱もその延長だそう。優秀なサッカー選手は、プレーする自分とは別に、上空からフィールド全体を見ている感覚があるという。

人間は視覚、聴覚、触覚など五感で情報を入力し、脳を通して、筋肉の動きとして出力される。言葉を発するのも目を動かすのも筋肉の動きだ。その入力と出力の間に介在するのが意識だと考えられる。

■ 「同じ」を認識できるのが人間

動物も眠るのだから意識はあるはずだ。魚も眠る。先生が「よくわかってないから面白い」と研究する昆虫も、どうやら眠るらしい。しかし、動物と人間の意識には絶対的な差がある。それは何か？

先生の飼った猫・まるは、言葉がわかるわけではないが「まる」と呼ぶ相手の声を聞き分けている。猫の鳴き声を聞き分けられる人間は少ないが、猫はすべて絶対音感を持ち聞き分ける。犬の嗅覚は人間の1万倍と言われる。動物ごとに得意分野は異なるが、「違い」を感知する能力が人間に比べて断然高い。たとえばリンゴを見たとき、

動物は1個1個のリンゴを違うものとして区別するが、人間はひとくくりにして「リンゴ」と認識する。

「同じ」を認識するのは人間の能力でもある。講演会場のようには知らない人がたくさんいても、同じような人間だからと安心していられるが、猫なら飛んで逃げるだろう。言語も発達した。「青」という文字を見ても、「あお」という音を聞いても、我々は青い色を共通認識として持てる。一方動物は感覚的なので「青」は黒だ。黒なら青だ。人間の子供は3歳くらいになって、自分を他人と同じ立場に置いて推論できるようになると一気に知能が発達する。また、人間が等価という概念を持ったことで物々交換が始まり、貨幣経済に発展した。

■ 人はすべて同じという錯覚

しかし、人はすべて同じと思うのは錯覚で、そこに「壁」が生まれる。一神教の価値観を持つ人々と違って、日本人は、物事はすべて無常であることを知っているはずだ。「行く川の流れるは絶えずして……」や「祇園精舎の鐘の声……」である。人間の体を構成する分子でさえ7年で100%入れ替わるとか。スマホで伝達可能なものがすべてではない。ニュースはすでに過去のこと、一寸先は闇と知るべし。

意識はその人の主体性そのものだが、本人から見れば、意識がないときは死んでいるのも同然。死んでも本人は何も困らない。「では何のために生きているのか？ 人のため、世のためでしょ！」

作品のベースは伝統の技法ではなく自分の生き様です



銀彩花器 (2012年)



銀彩花器 (2012年)

陶芸 寺本 守

Teramoto Mamoru

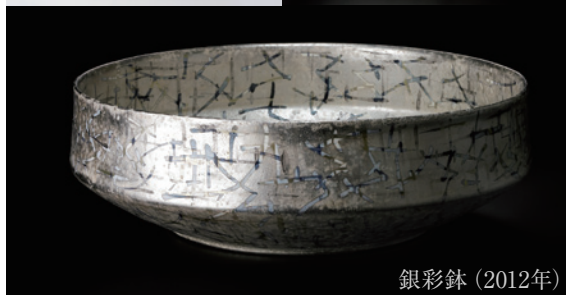
1949年 神奈川県生まれ
 1975年 九谷で松本佐一氏に師事
 1976年 笠間市に築窯
 1980年 日本伝統工芸展初入選／茨城県芸術美術展優勝
 1996年 茨城県立医療大学モニュメント制作
 1997年 ハンドル国際陶芸イベント(フランス)審査員及び講演
 2004年 ニューヨーク・ギャラリー Genで二人展
 2007年 第2回菊池ビエンナーレ展入賞
 フランス国立セーブル美術館「TOJI」展
 2009年 パンブー鍛金展 ニューヨーク・穂堂
 2010年 伝統工芸陶芸部会展 日本工芸会賞
 MOA美術館21世紀の伝統工芸-世界の眼- 奨励賞
 2015年 日本伝統工芸展入選 (7度目)



黄白釉鍋壺 (2015年)



銀彩花器 (2012年)



銀彩鉢 (2012年)



聞き手:上野由美子(右)

古代オリエントガラス研究家。UCL(ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン)考古学研究所在籍中。2012年国際日本伝統工芸振興会の評議員。ARTP副団長として王家の谷発掘プロジェクトに参加(1999年～2002年)。聖心女子大学卒業論文『ペルシアガラスにおける円形切り装飾に関する考察』、修士論文『紀元前2000年紀に於けるコア・ガラス容器製作の線紋装飾に関する考察』ほか、執筆・著書多数。

——家業とは関係なく陶芸を始めたそうですね。
 父親は船会社に務める商社マンでした。若いころは学生運動が盛んで、それで捕まったりもして、社会性の高い仕事は自分には無理だと。焼物をやるチャンスをつくれた人がいて、漆もやりたかったけど焼物でいいやと。
 ——あまりこだわりのないんですね。笠間に来たのはいつ、どういう理由でなんですか。

焼物という技を使いながらも、型に捕われない自由な作風を貫く寺本守氏。窯を持つ茨城県笠間市は焼物のまちとしての歴史は長いが、笠間独特の様式や技法はなく、それらに縛られない気風が、寺本氏の奔放さをうまく引き出したのかもしれない。人気の「銀彩」シリーズは、陶磁器とは思えない鈍く輝く地肌、意表をつく動的な模様が映え、一目見て記憶に残る。近年の黄白釉の鍋壺は一転、癒やされるクリーム色の地肌と幾何的な曲線で構成され、また独特の世界を見せてくれている。何メートルもあるモニュメント作品を作ることもある。

最初は益子を紹介されたのだけど、広くて作家も多くて、向いてないなど。笠間は歴史はあるけど親分のような窯はなくて、自分でもやれそうだと感じたんです。1年だけ石川県の九谷で轆轤^{ろくろ}や絵付けを習った後、笠間に窯を作りました。1976年、27歳の時です。外から来た窯が多く、私は50番目のよそ者でしたから、形式に捕われることなくやれました。笠間焼は関東ローム層から出土する良い陶土があつて発展したのですが、現在は採取できず、全国から取り寄せています。それもあつて、たまたま笠間に住んでいる人が焼いてますよという感じで、自由に作品が作れる風気が培われていますね。

私の作品も、伝統的な技法をベースにしているわけではなく、自分の生き様がベースになっています。だから作風は常に変化していて、何十種類と変えて作っています。ほとんど同じものは作りません。

——作品作りで心掛けていることはありますか。

意外と人の意見を無視しないことです。自分では出来が悪いと思つていても、『これは良いですね!』と言われ、びっくりすることがあります。そうした時は無視しないで反省材料として取っておきます。以前、伝統工芸展などに出品せず、個展だけで新作を発表していた時期があるのですが、ある人に『このままじゃ残っていけないよ。また出したら!』と言われて出すようになりました。言われなかったら出してないでしょうね。

——その日本伝統工芸展の締め切りが近いですが。

もう出品作品はできています。それを聞いて今日見に来る方がいます。東日本で初めての陶芸専門の美術館・茨城県陶芸美術館の金子賢治館長です。

——こちらには登り釜もあります。火を入れると一週間くらい焚きつづけるのか?

5日間ですね。焼く物の種類や目的によって、電気窯、ガス窯、登り窯、穴窯を使い分けています。登り窯は山



↑4連の登り窯。奥は単独の穴窯。



↑工房内には、1人の作家のものと思えない多彩な作品が並ぶ。



→茨城県陶芸美術館の金子賢治館長(右)も寺本ファンの一人。



黄白釉鍋壺(2015年)

の斜面に作ることで、炎の熱を余すことなく利用し、少ない薪で多くの作品を焼き上げることができる効率的な窯です。1番下の部屋の温度を約1300℃まで上げると、余熱で2番目の部屋は約1000℃まで上がります。その2番目の部屋の横から薪を入れ、1300℃に上げていきます。この繰り返しで3番目、4番目の部屋も同時に焼き上げることができます。若い頃は3人くらいで焼いていましたが、最近はアルバイトをお願いして、6人体制の3交代でやっています。

——窯の違いによって作品はどう変わりますか。

登り窯は、薪の灰が作品に付着することで変化が出ます。また窯の中は酸素量が非常に不安定になるため、同じ釉薬を使っても色合いが違います。電気窯やガス窯は、磁器などきれいな物を焼くのに適しています。穴窯ではいろいろと遊んで試行錯誤しています。

——不思議な銀彩はどうやってできるのですか。

純銀は約962℃で溶けてしまうので、高温の窯で焼くと流れ落ちてしまいます。そこで、生地に釉薬をかけて高温で焼いた後、青釉をかけ低温で焼きます。その上に銀彩をして焼き付けます。銀彩部を手で触れると表面に凹凸を感じますが、これは上絵として釉薬の上に銀彩を施した証拠です。上絵である以上、銀は次第に酸化して「いぶし銀」と呼ばれる少し黒ずんだ状態になります。その変化も味わってください。

——人気があつても同じものは作らないのですか。

作ってほしいと頼まれて作ることもあるけど、お金が儲かるから作るというのは嫌なんです。デザインは全部違います。本当は同じ技法は2年以上やりたくないんですよ。とはいえ、新しい試作はダメなものが多くて、壊れます。先日4トンダンブ1台分の壊した陶片を出しましたが、人の意見に耳を傾けつつ、新しいものにチャレンジしていきたいです。

物事がうまくいく脳の使い方、それがNLPなんです。

福岡在住の吉村裕司さんは、経営コンサルタントとして、IT、医療・介護、住宅、流通、販売など、幅広い企業のサポートをしつつ、一般社会人対象のコミュニケーション・セミナーも200回以上開催し、社会貢献をしている。そんな吉村さんが、会社設立年の2007年に取得したのが、NLPマスタープラクティショナー資格だ。

NLPをひとことと言うと、「物事がうまくいく脳の使い方」。世の中には、仕事上はもちろん、プライベートでの家族との接し方まで、抜群に上手な人がいる。脳の使い方の違いを学べば、そうした能力を誰もが発揮できるようになるのだ。

■仕事に危機感を抱いた中で出会った資格

吉村さんがこの資格に出会ったのは、仕事で壁を感じた時だった。コンサルティング業務の中で、クライアント企業で働く人たちのモチベーションを上げるにはどうしたらいいのか？ 離職しないで自信を持って仕事に取り組んでもらうにはどうしたらいいのか？ という課題の答えが見つからず悩んでいた。今後は心理学なども深く学ばないと仕事を続けられないのではないかと、危機感を抱きながらネット検索をしていたところ、NLPが目にとまった。これだ！と感じて受講を決めた。

資格をとって、自分の中で大きく変化があった。実は意外と人見知りで、初対面では緊張してうまく話せなかったのだが、受講後は初対面を気にすることなくコミュニケーションできるし、何百人もの前で講演までできるようになった。人と交流する機会が増え、人生が変わったとまで言う。

株式会社オール・マイ・プレジャー
代表取締役

吉村裕司さん

大手レンタルビデオショップの店員から、1年半後に新事業戦略室の室長代理に抜擢されるなど活躍後、地元福岡の経営コンサルティング会社に転職。現場主義のコンサルティングで、より多くの人に生き生きと充実した人生を歩んでほしいと願い、2007年に株式会社オール・マイ・プレジャーを設立。1972年生まれ。



今では、地元・福岡の地で「プラクティショナー資格コース」を主催する。多くの人がそのノウハウを学べる場を創造するまでになり、本業以外でも人の役に立っていることを実感するという。

■より良い社会のために自分ができること

「社会に役立つということがおもしろいかもしれませんが、より良い社会になるには、親が変わる、教育者が変わる、経営者が変わることが欠かせないと考えています。なぜならば、この人たちは、人の人生のステージにおいて段階的に（親↓教育者↓経営者）影響を与えていく人たちだからです。自分に何ができるかと考えた時に、自然とこの人たちにNLPを伝えたいと思うようになりました。経営者に対してはコンサルタント業務の一環として、そして、社会人対象セミナーの中で、親、もしくは将来親になれる方、また参加される教育関係の方たちに向けて、少しずつでも発信できればと考え活動しています」

吉村さんから資格取得を考えている方へ。

「資格を取得して本当に役立つのか、自分に使いこなせるのか、また、取得のための時間や費用など、いろいろ迷うことが多いと思います。でも、これだけは言えます。自分への投資、学びへの投資は、時間が経てば経つほどさらに役に立つものに変わっていきます。NLPは間違いなく、その選択肢の一つとなると考えます。実践すると必ず結果が出てくるのがNLPの良いところです。体験セミナーもありますので、取得の前に覗いてみてください。そこで判断すればよいと思います」

●資格の認定元

株式会社 ホロンPBI 〒530-0054 大阪府大阪市北区南森町2-3-13-2F TEL 06-6363-0890 <http://www.holonpbi.com/>